特別
チ12
3643
45(1)

内閣文庫

音也玉渕集序

物換星移

梅月ふ[illegible]

[illegible]書文車[illegible]中

[illegible]山也師時中翁

庚妥ゞ[illegible]

梓[illegible]

故梅若誠太郎氏
昭和四年十月廿日
梅若重戸氏
寄贈

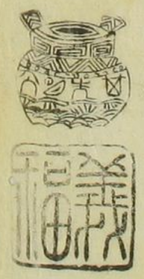
全五巻

行ひ八傳写に誤りつゝん
る我思へ共也ちなを八師の教い
受る人に成へ出さゞる書
なり者し適ハ縁ふよりを傳
求へ足る人懷に源し聞人
口と写らを徒ふ托ちんとを

悲む新〻義に事深く
秘し厚く震るよりを動まを
傳我傳へ実と失ふまく多し
悪きハ人ふとちを我もすく
善ハ人よも拾ちを家も拙
〻ゆうハ義に在弦不傳

古梁書類聚の代々多
徳すること是真人乃本意
なるべしと
寛保三癸亥年皐月

今村義福序



音韻玉渕集類用源

巻之一

一五音入位之辨　二丁目ウ
一漢字反切之事　七丁ウ
一文字之つゝき方　十一ヲ
一ゝ字の重なり極の事　十三ヲ
一濁字を呑て問いう系なへ　十九ヲ
うゝかゝのゝ
一ゐ書換ゑ音ハワの音をチト　廿一ウ
唱へる定格の事
一ゝ字ゝゝつゝるゝ濁　廿一ヲ
新濁をゝる
一唇舌齒牙之角の事　七丁ウ
一引字之例　九丁ウ
一書仮の連声の事　十三ヲ
一濁字より極り極の事　十六ヲ
一入声ゝクの音よりかきく　十九ウ
けこへうつりやすき事
一かきくけこ さしすせそ　廿一ウ
たちつてと なにぬねの
はひふへほ まみむめも
濁音の事
一ゝもゝつゝゝ日月ゝゝの事　廿二ヲ
一ウ二ムの三門の事　廿三ヲ

一二字同音なるもの　十三ヲ
一かきくけこさしすせそ
たちつてと行通るもの　十七ウ
一かきくけこの濁音なるもの　十七ウ
一をひふへほの濁音のもの　十八ヲ
一うくすつぬふむゆるゝもの
うるあれ字の事　十九ヲ
一ゑけせてねへめえれ表うり
うるゑの字なるもの　二十ウ
一軟濁のもの　二十一ヲ
一ふれ字のふのなるもの　二十一ウ
一てれなるゑうるれちのなるもの　二十二ヲ
一ちゝ字ゐえなむのなるもの　十二ウ
一さしすせそと出さうてらふ
ふるもの　十七ウ
一をよぬねの鼻へ著くるもの　十八ノ
一ぱのうさたおはまやらわ
うるはの字なる事　十九ヲ
一いきしちるひみゐをいうり
うるあれ字のもの　十九ウ
一をうえれるの変　二十ウ
一新濁半濁のもの　二十一ウ
一たちつてとをうるあのふれ
字のもの　二十二ヲ

一洲の間あるあれ字のもの
おのつれるのもの　十二ウ
一ゆよのるれるもの　十二ヲ
一ひれるのもの　同
一ぬのるれるもの　同ウ
一くるれるの事　十二ヲ
一ふのるれる清字のもの　同
一きのるれる　十五ウ
一たちつてとらるれろ　五音の下　十六ウ
一二字ものもの　十七ヲ
一引字をするもの　十七ヲ
一二字濁て一字のもの　十八ヲ
一されるもの　十二ウ
一ゝ字のもの　十二ウ
一しのるれるもの　十三ヲ
一るれるの事　同ウ
一むのるれる　十二ヲ
一ちのるれる事　同
一をたれる字のもの　十五ヲ
一ひふへほのるれる　十六ヲ
一三字もの下　十六ウ
一三字まる音字のもの　十七ヲ
一二字音にて一字のもの　同ウ
一一字濁て一字のもの　十八ウ

一ゆててふをはなのもとにはる　廿九ウ

巻之二

一百歌人秋角合の歌

巻之三

一拍子の海根元は毎　三丁
一かゝりの拍子はる　四ウ
一西ゝる拍子枕詞の場　六丁ウ
一氣の海　八ヲ
一一祝二機二変はる　八丁ウ
一一訳は海分十二調子律呂は　九ウ
毎同〳〵異解
一機の論　十二ウ
一音声の毎　十八ノ
一壱は海　十ウ
一変のつゝはもはる　十二ウ
一時変はる　十二ヲ
一声は横竪のる　十三ノ
一ひゞきの毎　十三ヲ
一ひゞづゝはの毎　十四ウ
一呂律のとゝちはる　十六ヲ

一祝言恒膳の変はる　十七ヲ
一拍子のひのる　十九ウ
一進退の五拍子はる　廿一ウ
一七ツ拍子の下　廿二ヲ
一末の拍子はる　同ウ
一花拍子のる　同
一口意心はる　廿三ヲ
一心は亟処はる　廿五ウ
一序破急はる　廿七ヲ
一五段五段の聖はる　廿九ウ
一横竪はる　廿七ヲ
一五切諸五〳〵拍子はる　廿一ノ
一五五拍子はる　同ウ
一五一拍子の下　廿二ヲ
一は拍子はる　同ウ
一今合〳〵の下　同
一心の曲はる　廿五ヲ
一〳〵の位はる　廿七ヲ
一音冠はる　廿八ヲ

巻四

一獨曲骨髓はる　一丁ヲ
一又音はる毎　七ヲ

一十徘の次第　十一ウ
一膳腐敗のこと　十五ヲ
一偽ワキの事　十五ウ
一ふりとひきこと　十六ウ
一まくらことば言とこと論　十八ヲ
一皮肉の弓こと　十九ヲ
一ふりよりず羽色同あらふりかこと　十九ヲ
一心と切口と切或ハ不切若ハの事　廿二ヲ
一弧ハこと　廿三ヲ
一文字と長さ弧のこと　廿六ウ
一上中下の差別　十五ヲ
一力屋細屋のこと　同ウ
一吟味毎　十六ヲ
一たりもの毎　同ウ
一皮肉骨の事　十八ウ
一大小小矢ていこと　十八ウ
一市壱さしたの毎　十九ヲ
一祝人の曲の事　廿ウ
一ハ為山の賢人　壱近の賢人　後壱人なこと
一ハ代ハ早ハ　廿六ヲ
一壱ハ代ハ実ハ弧のこと　同ウ

曲のおくいのこと　廿六ウ
壱枝の曲の事　廿七ヲ
一白次ハこと　廿八ヲ
一長と短と不ならぬ所若ハ　廿二ヲ
一弁所の事　廿三ウ
一シテワキ同者たるおとこと　廿六ヲ
て弧て矢ばるこの差別
一下の中ハ代の事　廿七ウ
一指くいこの差別　同
一二字ぐりハこと　廿九ウ
一二字ぐりハこと　卅十ヲ
一次ぬいこと　廿六ヲ
一めりざこ不ざこのこと　廿八ヲ
一白切の長短のこと　同ウ
一白まくきのこと　廿三ウ
一二調徴代の事　廿六ヲ
一小こくこのこと　廿五ヲ
一陰代たり湯のたり代こと　廿七ヲ
一中者ものと一ぜこの　同
代ものこと
一ふるこ壱ものこの差別　同ウ
一ふるこのこ中り代こと　廿九ヲ
一ふるこのこ　卅十ヲ

一入ふしの事　四十ヲ
一打ちふしの事　同ウ
一五音を引く下声を揚る
平かなる所用ふしの揚り　四十一ヲ

巻之下

一落しふしの事　二丁ヲ
一のつるふしの事　三ヲ
一下るふしの事　四ウ
一さわる声の事　五ウ
一ふり川の事　六ヲ
一中にゆる声の事　七ウ
一六川の事　八ヲ

一一字ちりの事　同ウ
一二字打ちりの事　四十一ヲ
一一字清二字清の事　二ウ
一四すて節の事　三ヲ
一のむ声の事　五ウ
一重る声の事　六ヲ
一中息出しの事　七ウ
一さりて入の事　同
一三字くずりの事　八

一三字さくずりの事　八ウ
一序の二字の事　九ヲ
一ひろふしの事　同ウ
一とするふしの事　同ヲ
一文字をうびの事　十ヲ
一ふる声の事　同ウ
一さげを声の事　十一ウ
一彼意の事　十二ヲ
一長川の儀羽の示を定る
あるいはうき事　十二ウ
一イロの事　十三ヲ
一色の息の事　十四ウ

一三字くりの事　八ウ
一五字のこ事　九ヲ
一拾入って拾ハ殺ハ　同ウ
一もこ重ふしの事　十ヲ
一熟してふしと急ぐ事　同
一ふるとなまと云る声の事　十一ヲ
一おとしの事　十二ヲ
一曲と云すして拍子とされ拍子ヿ
様の曲と云色といふ事　十二ウ
一調子辰巳にくずりふ敷事　十三ヲ
一吹賞の事　同ウ
一セイふく出る口年の事　十四ウ

一ひものゝ　十五ヲ
一ニテイ出ハのゝ　十六ヲ
一サシの赤初よりかゝるのゝ　十七ヲ
フレは豆ものゝ　十八ヲ
一同着の下　十九ヲ
一祇園ふゝの麦　廿一ウ
一兄のいたをてぬうちくるゝ　廿三ヲ
一いのゝ下　廿三ウ
一内ゝの麦　廿五ヲ
一くせうの下　廿六ヲ
一中入の麦　廿九ウ
一指の出ハ　廿ウ
一指ゝとくづもゝ　廿一ヲ
一ゝゝゝきの下　廿二ヲ
一ゝ上ハゆりのゝ　同
一指ゝハうゝのゝ　廿二ヲ
一ゝのゝゝとゝの帯　廿四ヲ
右同源の帯ハ大概と書あゝハ微細ゝ有さハ筆紙
ゝるふゝゝゝ有
一指の出ハ　廿ウ
一指ゝ　廿一ヲ
一ゝ　廿二ヲ
一下ハ　同
一キリの下　廿二ヲ
一ゝ古の帯　廿四ヲ
一ゝ　十五ウ
一下ゝの下ゝ　十七ヲ
一小袖の序ハ二字のゝ　十七ヲ
一呼ゝけゝて出ゝ　十九ヲ
一初度の同書ハ下　廿一ヲ
一詰ゝ経文後和ふゝ和紙ゝ　廿二ヲ
一のゝ下　廿三ウ
一ゝ下の同書乃下　同ウ
一ゝりハ　同
一サシゝて下ゝ　廿五ウ
一御義の下　廿八ウ
一ゝ　廿九ウ

凡例

一玉渕集文冊墨付二百丁八先師村中義庚安ど筆記之
其餘數丁ハ義福追加ス

一本書の誤を所々是を捜出し或ハ訳よ所々ハ
かな文のかゝりよ志ゝ伝る物ハ字ハ鑿遊
書加へし

一代立冊ゝ書りしゝる事又ハ重ねて書ゝる且幸して後人ハ
教示ハ先師老人ハ習ひ重ゝ
ひらゝ書ものつゝ為ハ〻〻 祇校折と云ふ義福述

音曲玉渕集一　附合音便巻

編集 時中、羽庚安
辭業 今村義福述

言語音聲ハ附合ハ乃ハ
續くとになつとき後あり異合と云ふを五音律
呂ハ發用ゝて律呂則陽なり万物ハ發育を
すへて陰陽乃ハ不なれ共ゝ獨陽生せん
獨陰ハ〻〻ゝ陰陽和合ゝ乃ハ〻〻生成
を成事を得ハ人ハ言語音聲ゝ附合音節あ
りて自然乃妙用をなすを皆これ律呂ハ和合
より出る事なり楽 謡曲ハかと長音に妙ゝ

付て所詮なきは先を除せんまは格あり用合れ
ぬるに事後乃ち所つかんよきはかくく
或は云葉かどきもちて間を碍りたるひは文字く
きりかくて用をまるに先婦よなりくく
自己天成れ言音拙矣へ所あるすや拙きなきと
又すてに事曲となりて風ひ扱とまるとは無く
平日言語れ扱ひ乃ちふてと聲れ文をなする
を叶ふる所所をたりあるるたはちにみへし
故ま今思ひまるし越ちなるのりく雖し留む

逐一又祇きは枚く拳へ乃ち一定大要一行二行
れ例をたりりく准授に倚ある乃ちなりとかく
文句乃うはり和うに言吾れ扱ひ鄙野なるぬ
やうかと常く心を乎ひて天成乃異合音便を
自得す乳事たりんり

二首連歌は又音連聲あり月のなか乃人
あまを知すんを有なるん

五音五位横竪直音拗音次第

一位 上音	二位 中	三位 中上	四位 下中	五位 下
宮 あ(イヤウワ)	い(イイウヰ)	う(イユウウ)	え(イエウエ)	を(イヨウオ)
角 か(キヤクワ)	き(キイクヰ)	く(キユクウ)	け(キエクヱ)	こ(キヨクオ)
商 さ(シヤスワ)	し(シイスヰ)	す(シユスウ)	せ(シエスヱ)	そ(シヨスオ)
徵 た(チヤツワ)	ち(チイツヰ)	つ(チユツウ)	て(チエツヱ)	と(チヨツオ)
徵 な(ニヤヌワ)	に(ニイヌヰ)	ぬ(ニユヌウ)	ね(ニエヌヱ)	の(ニヨヌオ)
羽 は(ヒヤフワ)	ひ(ヒイフヰ)	ふ(ヒユフウ)	へ(ヒエフヱ)	ほ(ヒヨフオ)
羽 ま(ミヤムワ)	み(ミイムヰ)	む(ミユムウ)	め(ミエムヱ)	も(ミヨムオ)
	喉内	舌内	唇内	唇外
	清	清	濁	清
			軽	重
			濁	清
			喉外	舌内
			兼牙	兼齒
			濁	濁
			舌中	舌本
			當齶	兼鼻
			濁	清
			舌末	上ル
			兼鼻	口
			清	清

宮 や(イヤユワ) い(イイユヰ) ゆ(イユユウ) え(イエユヱ) よ(イヨユオ)

徵 ら(リヤルワ) り(リイルヰ) る(リユルウ) れ(リエルヱ) ろ(リヨルオ)

宮 わ(ヰヤウワ) ゐ(ヰイウヰ) う(ヰユウウ) ゑ(ヰエウヱ) を(ヰヨウオ)

羽 羽 喉

あ い の類を直音(チヨクオン)といふ ウイ ウイ の類を拗音(ヨウオン)といふ

竪ハ五音相通　横ハ同韻相通也

あ 横一行爲五音之首稱之男声(ナ)爲合音陰声也

い う え を 横四行皆稱女声(ト)爲合音陽聲也

第二位生(ニ)第四位生(ニ)第五位故(ニ)三爲能生(ノウシヤウ)四五爲所生(シヨシヤウ)

第三位生(ニ)第三位生(ニ)第五位故(ニ)三爲能生(ノウシヤウ)四五爲所生(シヨシヤウ)

かきくけこ　牙声(ガセイ)ト定ル支声ノ脣(クチビル)ヨリ出(ダ)ス喉(ノド)ヨリ出トイヘトモ

か(カ)ト成直チハオニ當ル故牙声トスル也

さしすせそ　齒声ト定ル支声ノ取。發ハ さたらか 同ク
舌内ナレ共 さ ト成直チハ齒ニ當ル故也

音

あわや宮さこそ商なれ か ハ角よ たから ハ徵よて ほま ハ羽そ〜
あ 上音 い ハ中なりやう 中上 え ハトの中よ を こそ下音よ
ハ上中下ハあかさたな いきしちにゝる声よ唱ふまは自と又通ヨ分ル
はまの水 たから の火よそ か ハ木けろ さ こそ金よて あわや 土ちも
元ハ又性よて音曲ヨ入ぬるなれども類にふれて記ス

あ ハ諸字の根なれ故ハ五音五十字門横竪に居 あ の響ヨ支
自然の理也さて物音ハ第二位を母ヨりて やいゆえよ まも
第三を母ヨりて わゐうゑを 能生所生和合する事

元来自ヲ持ル字我レ音ハ直音也先ヨ第二第三を母と
して能生所生和合して生する所の音ハ物音也先第二
第三を母ヨりて五十字門の中レ第二位の字第三レ
字也其故ハ能生レ母ハ第二第三ハ字所生のヨハ第一第
四第五の字也但第二第三ヒまに能生所生となる也先
あ ハ諸字の能生なれ故 あ ヨリ い ヨリ う を生し い ヨリ え
をもし う ヨリ を を生ス能ヨリ又ハ又字 あいうえを 能
生して五十字門を出生する也其故ハ
第一ノ横行
かさたなはまやらわ ハ あ ヨリ生する故ヨまれを唱ふ

第二 所以名始終よ亦あの響き有り

きしちにひみいりゐハいより生ずる故よ名始終よ

いろはにきつり

第三 くすつぬふむゆるうハうより生ずる故よ名始終よ

うのひく有

第四 けせてねへめえれゑハゑより生ずる故よ名始終に

ゑのひく有

第五 こそとのもよろをハをより生ずる故よ名始終に

をろひく有

如此実初ハあの字を根ちらてあいうえをの又字諸字ハ能生の母と成なり故よ音末に名ちの韻き有なり

あわやの三字ハ同韻ハ中よも別なる故よイ井エ江ヲオの音を学ちる也

又曰やわの二字ハいうハ二字より生ずる也其ゆへやと唱ふまはえたていを生ハ其後口を開けはちのつゝやを成ずるなり

又わと唱ふまはえたてうを生ハ其後口を開け

を[わ]を成さるなり先よりて[や]と[わ]とハ唱ふ
実初よ[い][う]の音微細なる故に別ーて[や][い]
の所生[わ][う]乃所生の字くいふ也
此[や]を能生ーて[いゆえよ]の四字を生ーー又
[わ]を能生ーて[わうゐを]乃四字を生ずる也
如是横竪の能生所生を知定めて字毎ニ
きを校すれを拗音の生所分明なり
ナラベカンガフル

あ[イウ] い[イウ] う[イウ] え[イウ] を[イウ]

五一

か[キヤクワ] き[キイクイ] く[キユクウ] け[キエクヱ] こ[キヨクオ]

さ[スシ] た[ツチ] な[ヌニ] は[フヒ] ま[ムミ] や[ユイ] ら[ルリ] わ[ウ井]

各配当ハ但[かきくけこ]の内そやさハ第一の
[か]の字に第二を母とする時彼母乃音ハ[き]也
也ニ又[い]所生の[や]を呼ばるハ[キヤ]なる
なり同く[か]ニ第三を母とする時母の音ハ[く]
也也ニ又[う]所生の[わ]を呼ばるハ[クワ]なる
なる余前ノ如圖五十字門何義第二第三を
母ーー[やいゆえよ][わうゐを]是を同行の
子とする也

五二

右の如く横豎より能生所生を配合すれば二門の物
音つゞれ一字より各三門の音生じ命不有情
開口發声よりこのはゝ共音生ずる乳なり（上八佛神より下八名
歟よりうまれて式音声を出ス又有情のこゝろ風乃至木
より舟を水乃石よりうゝたゝ波情の声迄も元より自生ス
文曰第二第三を同行れ母とする変（第二）あ（喉）（第二）い（古）
（第三）う（唇）也（五）ハ（ゝ）（ゝ）を（ハ）（ゝ）ハ故より能生より物して
（第四）え（舌）（第五）を（唇）也各第四第五の字を所生と
成り又能生も成なりかくのごとくまに能生所
生ゝ物て色盡より相通ずる事也

一喉舌唇（コウゼツシン）の三門の事

あいうえを　喉門
かきくけこ
やいゆえよ
さしすせそ
たちつてと　古門
なにぬねの（ハ字も古門也）
らりるれろ
はひふへほ　唇門
まみむめも
わ

あかさたなはまやらわ　喉
いきしちにひみいりゐ　舌
うくすつぬふむゆるう　唇
えけせてねへめえれゑ　舌
をこそとのかもよろを　唇

横ト竪トノ喉舌唇ヲ考ヘテ唱フヘシ

一漢字反切かな反しの事

輕重清濁依上字　平上去入依下字

上竪下横　横歸本　竪留末

上竪下横ニ付テハ

○衣ノ字　於希切　いト反ル
呉音ニテハ於希切えト反ル

○生ノ字　所京切　せいト反ル
呉音ニテハ所京切しやうト反ル

あ
かくけこ
さすせそ
たてとぬ
はへほ
まめも
やゆよ
られろ
わゐゑを

ヤ行ハ後ニ唱フ故ニ下也
下横ト横ニ見也

又オケト呼テ反スモ於ハ
わゐうえをノ上ケセテねノけト出合
えト反ル

出合反字ナル故カト反ル

於ハ前ニ唱フ故ニ上也
上竪トハタテニ見也

又ヨキヤウト呼テ反スモ
うノ拗音ニ有キヤウノキヤハ
かノ拗音ニ有出合さノ
拗音ニテしゃ也則キヤウノ
うヲ合テしやうト反ル

輕重清濁依上字　平上去入依下字とゝのハたゝて

○未ノ字　亡貴切　びト反ル

○訝ノ字　呼田切　げん反ル

ぬりいみ　はぴにちしきい

ぴふへか　此生合也　上ニ呼字亡ト濁ル故ビトニヨル下ニ呼字貴ト一字かゝる故ビト一字カナニ反ル

かきくけこ　此生合也　上ニ唱フ字呼ト濁ル故ゲト清ル故ゲト清ル下ニ唱フ字田ト濁ル故ゲニ合セテけト反ル

ゑれえめへねてせ

横歸本とゝのハたゝは

○各ノ字　柯洛切　かくト反ル

あかさたなはまやらわ

前ニ呼字柯

横ハ本ニ歸スト前ニ呼字ノかニモドリテ又依下字ノ洛ノくヲ添テかくト反ル也

後ニ呼字洛也

右ハ引韻ノ字闌合ノ分明ナラザル時玉篇ノ反切以為可知之記

竪留末とゝのハたゝは

○福ノ字　方伏切　ふくト反ル

前ニ呼字方

はひふへほ

後ニ呼字伏也

竪ハ留末ニ後ニ呼字ノふくト反ル

○交ノ字　古メ切　かうト反ル

かきくけこ

前ニ呼字古

後ニ呼字メ也故ニかうト反ル

一引字の例

鶯（アウ）あふ 逢
邑（イウ）ふ 云
植（ウフ）
高（タウ）むかふ 向
久（キウ）やきう 柳生
空（クウ）すくふ 救
相（サウ）いさふ 誘
引（インウ）ちうと 舅
数（スウ）すふ 吸
唐（タウ）あうよ 与
中（チウ）おちうと 落人
通（ツウ）かつうは 且
腦（ナウ）かうふ 叶
入（ニウ）てふう 羽生
縫（ホウ）ぬふ
天（テウ）てふ 酔
翁（ヲウ）ちうな 姫
教（ケウ）ふ 今日
鳥（テウ）いふ 出
蕉（セウ）みやふ 見
公（コウ）こふ 乞
繞（ニヨウ）
登（トウ）ふ 向
宗（ソウ）そふ 添
能（ノウ）きのふ 昨日

方（ハウ）いたふ 祝
猛（ミウ）まう 舞
陽（ヤウ）やうく 漸
郎（ラウ）あらふ 洗
王（ワウ）
彪（ヒウ）ひうう 日向
風（フウ）
表（ヒヨウ）うゑふ 植
奉（ホウ）りまう 吹
蒙（モウ）
妙（メウ）
遊（ユウ）ゆ 夕
葉（イヨウ）こえふ 越
用（ヨウ）くもふ 通
寮（レウ）
朧（ロウ）
妙（メウ）さむう 寒
止（とめふ）
妹（いもうと）
見（みう）
立（たつ）
離（えなれふ）
白（しらう）

△あかさたなはまやらわのまで五引音八拗音芸へ、
いつも用く也右ゐの外 京生丁平名令光

式たゝひ［やワ］まゞ所故ゟ開く也　又引音ゟ准ス類
八乙女（ヤラトメ）　やうあ　早乙女（サヲトメ）　さうあ　危（アヤウキ）　あやうき　俵（メハラ）田原　たゝら
毋上（ハハウヘ）　ゑうゝへ　巖（イハヲ）　いゝう　箒（ハハキ）　ゑうき　如延て唱ふ
式類　あかさたな　えまやらわ　のかゝ所故皆ゟ声（レニミヤウ）〜て開く也
△いきしちにひみいりゐ　并　ゆ（イユエヨ）いゝえゝ　此引音ハ訓（ヨミコエ）音ニ
皆うゝ刻て唱ふ　合音（スヰヘム）也
△うくすつぬふむゆるう　式引音刑音もよゝ皆うゝ
唱ふ　合音（スヰヘム）也　但式内ゆうハ右ゟ如くイゝウト刻ル
△えけせてねへめえれえ　式引音刑音もよゝ皆ゝト唱

［エウ］［キヨウ］　［チウ］［キヨウ］　［セウ］［シヨウ］　［テウ］［チヨウ］
［ニウ］［ヒヨウ］　［ヘウ］［ミヨウ］　［メウ］［リヨウ］　［レウ］
此延かゝ所ハ前ニテ皆合音（スヰヘム）也　全く刻字ニ非ス　物ゝに
蟲　ゑ川てう　花　ゑゝう　ゑ皆祖なゝ　又流ニ安　てう久　ゆゝう未ル
△をころとのかもよゝほ　式引音刑音もよゝ皆ゝト
唱ふ　合音（スヰヘム）也　又引音ゟ准ス類ひかゝをゝト唱フ
相　大仰　多恐　氷（ヒヤウリ）　融（ユウ）引ゝる　粧（ヤウ）ふゝ　火々出見
見てこ　後宇（ノチト延ル）　院　ゐうだのゝ　沛宇（ヲヒト延ル）　ぎよう
見皆のたゝひ皆ゝ声（レニヤウ）〜て合音（スヰヘム）也　此外多ゝ
一　文字うゝれ変　ロあひ所（ヒ）

はを一あるの母字を処 生字を捨て次の字へとやくらり身
へ一こそ一也故に短く成る仮名にて二所乃かな一字まで移乃
うつりあつて八なり一年竟母字をぬく時の有る生
成字短し一は都弁有へし或は生字下にて字下にて移
く出して能不も有又上下の章めちらひそうり
やうもちるへ一 又謡にて八所よりてうはまは佳
白形表不もを 二見せんやと思ひ 起々 〈系ちやこ思ひ

△あかさたなはまやらわ 此仮名八あのひぐきより あ、移る
三 真かうなりさの 十 今八あり さう
北 たすうあ表八 江 極母乃ふかなりそひ

△いきしちにひみいりゐ 此仮名八このひぐきより い、移る

松 沖よりいさ花いさり
千 かまて山よりそ
懐 忍意いう

楊 いそ初めいう
色 花もなりいちるしる
冥 紅々たいみへハ

△うくすつぬふむゆるう 此仮名八うの響より う、移る
白 花よなくうくひて
胡 対人を待ぬうきを

柳 今かくうきめ
京 待よりうあめや

△えけせてねへめえれ え 此仮名八えの ぐきより え、移る
伊 ほの仏せ待を
う 河も見るとめえぬ

松 けたてえほ
り 世ハまるけえる

をことのはのよろ木 世低名ハなの勿音より を移ル

花 元一ねことをすれひ　ゑ ゆとをひくへて

妄 そのおもうけハ　彩 あゆむへもおもれを

仏 老ぬ秋風乃　後 ゑるとをてろを

二字ゑ上のうつり

ゑ 宋代のことをを聞き　を からををくへく

格 妄執ゑひゆゑを　粉 ゑるくうををし

礼 法俗ハ何をを埋せ　卒 らをうれをろもおをうて

三 をを月も時よ家のをうをを後ハ

一音便の連聲乃変　唱へやう筆ゑ記ゑ可受口傳

百人一首　三人一所　三界一心

陽成院　冷泉院　せめて今ハまと

下ゑハわゑり　ゑゑもたゝく

一ゑゆ字ようううりやうれ事

訓の時を芸よ准して唱へ

○あ　いう　ゑを

かにぬのト唱フ

二五ヒ

但ゆ字を浄くてあれを

をつゝ音仮叶

恩愛　嗔恚

寒雲　輪廻　観音　ト唱　本音

○わかうらをかたぬねのとなり

はもわト後所ニテハなト唱　吸魚ハ

淳和　村邑

関羽　尊詠　感應

金盤銀盤

○やいゆえよ　ヨト唱フ

深夜　散位

陰陽　門院

人油　泉涌寺

変妖　萬葉　貪欲

神輿

圓融

春遊

右同

○はひふへほ　ホ唇ヲ急ニ合セテとづむ

三幷　玄賓

寒風　源平　遠浦

魂魄　先非　絹布　君辺　尖峯

但音曲流ようまぬ濁に唱へざるべきもの世類なり

かつのれたつ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

びんぼけ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

念心不乱　一会発起　一方八千

○さ―すせそ

ひらかな濁もを舌をひらへてそなへ―

ゆくそなへれば下れ歯音へ重く成也

満参　親子　涌水　安全　親疎

身三　錦繡　年数　耳泉　玄宗

○さ―ずぜぞ

右清音ノ所ニ記ス如舌先ノハグキニ

あてゝやうに唱へ―

金山　変成　神水　神前　先祖

源三位　源氏　三寸　現世　眷属

げんじの唱へ方ハ舌をひらへさせんとあるは傍よイ文字

を付るを直よげいじとよむことイヤ又眷属ヲ人ちん

ぞくト書モけヲ拗音ニて クヱと唱ふ時ハ舌をの

つゝ引ゆゑ故ゾノクゑへ舌あてゝず　又目築地ハ傍ニ

ン字ヲ付るハいノうがヨリぢノ字ようまでゞノかゑニ成安

き故よ舌を齒へ当ぢのゑかよ字あるやうまでゞノかゑニ成安

唱へきとのを―へ為を主につゝゞトヨムもイカヽもれ

皆音便を不得心故先

○たちつてと　ゐを浄くなゐれん音仮叶

邦鄭　船中　金鎚　心底　仙徳
進退　天地　感通　先帝　玄冬

○だぢづでど　ゐを浄くなゐれん音仮叶

梅檀　天竺　神通　南殿　槃特
禁断　班女　三途　怨敵　震動

○らりるれろ　ゐを浄くなゐれん音仮叶

安樂　禁裡　感涙　袞龍　参籠
散乱　千林　遠流　秦嶺　嶮路

一連の字よりうつりやうれん文　凡てつゐ字をキウトつもれたものつと音仮叶

○あいうえを

たちつてと　チヤヒ　チユヒ　ト唱フ

月庵　佛意　悉有　法縁　佛恩　本音
叱唖　厥陰　遏雲　支祢　八億

一握（イッチヤク）

○わ 是モたゝ通ス

哲王（テツワウ）　屈惑（クツワク）

○やいゆえよ

チヤ　チ　チユ　チエ　チヨト唱フ

不也尊者（ホツチヤソンジヤ）　八音（ハツチン）

出涌（シユツチユ）　佛縁（フツチエン）　物欲（モツチヨク）

塔頭（タツチウ）　毛ハタツトツメテ、ウリ渇音ハ音便ヅ　タガフ故チユトイフシ引テ唱フ

蓑笠翁（サリツトウ）

はモワトヨム所ニテハたト唱フ

今日者（ミヤウタ）ハ

摂陽郡談（セツヤウグンダン）　納音（ナツチン）

○はひふへほ

か

潔白（ケツハク）　法被（ハツヒ）

鉄鉢（テツハツ）　達筆（タツヒツ）

供遊（イツチウ）　ゆハいよ色する故ツメテノウツリ　チウト刺

節用集（セツヨウシフ）

実否（ジツフ）　一羅（イツラ）　合浦（カツホ）

末伏（マツフク）　秩邊（チツヘン）　末法（マツホウ）

ま濁よ唱ふ唇ヲ気ニ合セてくづむこと

○らりるれろ

舌を巻て唱ふ

婆竭羅（バカツラ）　出離（シユツリ）

没落（ボツラク）　悉令滅（シツリヤウメツ）

別涙（ベツルイ）　滅裂（メツレツ）　摂録（セツロク）

雑類（ザツルイ）　別例（ベツレイ）　実録（ジツロク）

○かきくけこへ移ノかハツメテうる

悉皆　悦喜　拔群　摂家　羯鼓
發向　一休　八苦　吉凶　葛根

○さーすせうる　右同

佛参　一子　拂子　出世　一足
鉄札　合掌　一脳　雪山　早速

○たちつてと　右同

接待　甲冑　密通　雑躰　出頭
薩埵　雪中　鉄鎚　越鳥　必得

○がぎぐげご　濁へ移ノかハ上のツメ字を呑ム

渇仰　別行　發願　雪月　密言
乞丐　剱疑　逸群　達藝　實語

○ざーずせうぢ　濁

佛像　密事　骨髄　忽然　血族　右同ノム

末座　鉄城　吉瑞　佛前　脫栗

○だぢづでど　濁

悉達　出陳　筆圖　別殿　越度

末代　変定　列廚子　寄傳　熱毒

右同ノム

○なにぬねの

刹那　出入　發怒　越年　實能

八難　脊肉　黠奴　失念　薛能

右同ノム

○ばびぶべぼ　濁

血判　佛平等　願文　執鞭　伐木

佛罰　熟病　節分　結襪生　發菩提

右同ノム

○まみむめも

末々　佛名　別夢　發明　悅目

別幕　逸民　即滅無量　必滅　見佛聞法

一ツメ字を呑てあいうえおへ移ればハまたるの心なり

○あいうえおを
スワニヌネノ　ヌヌ　ヌヌ

あいうえおをとなにぬねのとのるは濁もはなにぬねのノ拗音也

寶悪　生滅色　滋雲　唐宣へ　会仏寺

一入声の【ク】の音より【かきくけこ】の活字へうつるハ【ク】音をにゴして後ハ濁るなへうつるハ【ク】音女ノ心也

欲界　讀經　悪口　北溪　六根　本音

竹竿　悪鬼　白駒　肉桂　白黒

同濁字へうつる

落雁　木魚　國郡　六藝　覺悟

國号　六義　六具　剋限　悪業

同はひふへかへうつるハ清濁ともよろしく【ク】音より移ること

ゑ又【ク】音をツメテよむも有

若輩　囮筆　白布　國兵　白峯

北邙　憶病　作文　各別　國母

北方　六臂　獨夫　百遍　獨歩

一歌書ニ異音ハ「ツ」の音ヲ「チ」ト唱ヘ定格也

一吉質 秩 日筆 律越 闕 結 切 節

熟別帥 褐 達 八 鉢 塙 七

也ーて「ツ」の音れ字ハ一字ともも二字ともはあて唱

或ハのてうつ又ハちト唱へ名とく直ち唱へ

音ヨリ訓の文字へ移かも同前也

換れ数をつく 生月神に 一鉢を

日月を 唐土 必滅れ 越の国

颯々の 江月照ーー

一がぎぐげご ざじずぜぞ

だぢづでど ばびぶべぼ

右何ニモ濁ト成時ハ皇を兼ル取分がぎぐげごノ濁ハ皇を主ゆゆへ濁ヘ移ゆハ皇へ呑ミ濁ヘうつゆを

ツメテ移ゆなり

「なにぬねの まみむめも

らりるれろ ばびぶべぼ 世濁音ト亜同ス

だぢづでど 濁音ト亜同ス

太「ら」「ま」の三行ヲ皇へ呑モ濁ヘ同前故なり

一ち字より移ツるはな濁新濁も皇呑ヘるハな濁也

一訓の「つ」文字ハ直ち呼ふ又ツムレハ有吾て殺ふハたまくらを也

○まつ（松侍）義絶　繩正　イツ孩子　勝負（カツイロ）　何（イツ）

朽（クチル）　初春（ハツハル）　三四（ミツヨツ）　日嗣（ヒツギ）　蔦（ツタ）

○謹（ツツシンデ）　別（アトツサキ）　対立（ムカウタチ）　けつを　えつと　綱引（ヨツヒキ）

祈（ウツタヘ）　寸（ツ）て　元（ツ）て　成（ツ）て　かつのたゝひハツムレ

○山嶺（ヤマノカツ）　初月（ハツツキ）　千満殿（セノミツトノ）　木津川（コツカハ）　おそれつゝて

比分ハ訓ても呑て強フ

○鴻つ毛　此つヲ呑て強流モ有　亀江谷（ヤツ）日上

一「ぢ」「ず」「づ」

比濁音を冠帽ふ

ふぢ（冨士）　ふぢ（藤）　ミず（不見）　ミづ（水）　とぢ（文字）　とぢ（戸）　うず（雲珠）　うず（烏頭）　ゑぢ（檐）　ゑぢ（恥）　ゑず（殆）　ゑづ（外）　ゑぢ（刀自）　ゑぢ（因）　うず（數）　かづ（葛）

比ぢずノ濁ちゝす。ト活て呼ふ如舌づゝひヨすセ

ぢづノ濁音モ　ちつトスミテちゝふ如く腮へ舌ヲ

南て呼ふへしとを

但此ぢづノ濁音舌を腮へ強く角を茎と耳ゝ立て空

ホくゝ大ハ小。小ハ大トいつるのかゝうの訪そ舌抜ハ

尖（スルト）よちきやうる有へし見音伎れ也又濁ゑゝ

よりて比呼伎居一向余ゑちきも有物きた軍陳

先涼等をしノ濁点に呼ぶを未練とやいはんへし笑て
たゞうとゝいふの是又濁ひなり

ぢう 從　ぢん 仁　ぢやう 上　ぜう 尉　ぢよ 叙
ぢう 住　ぢん 塵　ぢやう 定　でう 牒　ぢよ 女
ぢゆ 儒　ぢや 邪　ぢやく 若　ぢよく 辱　ぢゆん 潤
ぢゆ 頭ニ鰻ミ　ぢや 茶薄シラス　ぢやく 著執シツ　ぢよく 濁　ぢゆん 純

ぢたゝび濁ひの分ち能く考へへし

一ぢづ 地ニ河いの仮名ふりうるはハ[い]文字をかく
呼ふへし

築地 ツイヂ　内陣 ナイヂン
平治 ハイヂ　相槌 アヒヅチ

系圖 ケイヅ　海津 カイヅ

一ウ喉 ニ舌 ム唇 の三河も事ち喉舌唇の分ち有
こゝとも三字とも亟角なり頭字ふりをもて呼
ふきを亟チョクに呼ふハ未練の訛りなり

うぢ 姥ニ　うづ 奪ニ　むべ 宜ニ　むま 馬ニ
むめ 梅ニ　むめ 埋ニ木井　うまれく 生ニ

生 うむハ 直ニ唱 むまるハ ハヌル　埋 うづむハ 直ニ唱 むりまハ ハヌル

一二字兩合の夏いろは擬乃やうよ猶ふやうん考

一字假名にもく成安きあり舌より発するを或は假名と記す
紙ひろ中より其もくなりてのひを又短くもーを名ろ
を発するを假名にたひの定規を知るゆ故なりそれ
少くとの假名は記きよつまて次の假名或は鼻へぬけ
或はちいさ記字大きよあり呼きかのたく不そハ
舌を動り発する文字僅を都ーー皆口内の定規な
き故其要りよなりもも色も又假名扱ひのごとき
心を付て口中を発するをすれをそるみ出来て推の
ケを失よあり年竟第と文字の間食をあるひに

ユ支を用ひさ教時ハ急に行向をて出ひ為和ひり文字
あつひ和ることもり心はてハ又行たるゆ不もあり又
食きを多るをすて口内為るハ泳音曲のやを考よ
なり形角為く能生所生の響れうりを熟通
能局を使ひ発ることて耳よたるぬやうよ福よ先すかち
音便の假行なる案

第一位
一あかさたなはまやらわ

先ハ陽声なる同音ゆ故ゆ口中開き息を音声
出色て文字ようきとり我ハもくゆ或は大きよあり

安く後く内よりたるむ字なり唇内をとゝのれずゆ
えむりふくして舌舌内を帰ゆまは音位ゆ貴
きて発ー

○ゆくまをそらゆ雲ゆ
もうハや

○「あれぬゆ」「あまれ」名の事

第二位

一いきしちにひみいりゐ

世字能生の文字故狭き字也必狭くして音の上ちゐれ
安ー少実を入れ心有べー

是ハ此まゝ一段と考ハ無ー

第三位

一うくすつぬふむゆるう

世字も能生の文字故狭ー但第二位とハ少違り有
唇に心を付すべしー

第四位

一えけせてねへめえれ

世字ハ不生の後居也舌のよた付て平く少き如安き
字ありそれ故強くあつらひてハ長いやしくゆゆ和
らに狭く舌扱ひすべー

○えても義まやたけ義れ長いすべハ雲乃うべ
うけてとちゝぬ多乃ゆく色

○[ゑ]の仮名を拗と拗音を唱ふる事 先ホウ文字のホウ そきらかなり

すゑ　うへ　さへ　えもく

○[け]の仮名を拗と拗音を唱ふる事

すけろ心　うけ怪ふ　生てい

第五位

一をこうとのほもよろた

此字も不生の文字也但第四位なれ分りきちへきく

して立た仮名也或は先ものこころあれば口内開き

音仮名をぶ唇をすぼめ唇をすぼめ唇をいきく拾きと心

を可也白切などに物不生 我むへし 但[ゑ]の字八橋

心得有へし別ま記ス

○ふしそれもおなしせのいろちのことをきりもと

○ゆをとかくをかふもくゆうたもを

○まこ面のよしよ

そうの不大きなるにてハ点まりなくゆ

ちうくゆなり

又曰引字の用く字のてきる時ハ大きなる物安き也

○たまゝぬハ山行ゆ

芭

諸行無常と

芭

東

生をうるに

天

急いて教うるよ

○[をれ]の仮名ウヲと拗音を唱ふる事

お祝ク　和尚きよ　ちゆり

をやう　けうを
きのふ　せうをやうの音　きやう書たう
かやうの引音もウヲと呼ふも大非也

○よの仮名をイヨと物音よ呼ふも悪
をよや　まよひ　とよのけり

一ンを字ハえ来むの字まて ウンム 亟用なり
他を字ハ舌内すて云ふ故ン円も必
とん字より引つき ン のかな消しわ已ス乃
下まて拍子多し 乾坤[illegible]公と

付て徳ふへし

一かきくけこ
さしすせそ
たちつてと

氏三行巻く乃南巳をづこて走
やすき仮名なり

○ツ多ハうれくさとちをふみ川あ紀こをかりられ
○毋多ハをろまの字ふるもあとこをへてたてをきろる
○也うつふもすくろをつきハ
○阿非亟をすくしむろる　徒よろ木の柳
かやうに行為をしを安し　文目をし仮故中をびさりかあ之
○松かりのすこ　伊ろさのを　塩やきころも

一さしすせそノ仮名ハ唇を唇と舌先を板歯（ムカハ）へよせちへ
さくふらくて唱ふるハ未熟よりなり

一がぎぐげご
濁音ハ鼻へ入仮名ハ濁音とする字ハかハ鼻へひゞ
くもの也ぬるすこそれを鼻よりたつるやうよ唱へ
てハ文字辛く聞苦しいやしくなり鼻へ入字上下ハ低
名へ引てうねるやうよ用ゐすへし

○おゞれ引　いさゝかよき　えゞるーき
かげきよ　かゞりハ男

一かにぬねの　鼻へひゞく仮名也もとハかハ
れぬやうよ用ゐすへし

○北　えゝ形よなれうーのゝ　ゝみゝ秋よりのちハいろゝん
○芭　ゝ名ぬいろゝふゝきやゝろものゝかゝろ

一えびふへゞ　濁音をさけて直にまゝむめもと唱ふる
いく強く唱へてハむいやし　形に濁りし

形に濁りへし
○北　さゞり
○北　さびーき　びと　みと　のゝよ濁りへし
○仏　悉皆成ぶつ　形ゝにふゝり形ゝにつムへし

○後 神よ歩きをえぶなり　和うに引へし

○杜 かべでのえなの　べト あトのろよこのふへし　ゲト もトのろッ呼ふへし　ゑニ　ゑんとハ イカヽ

○老 晨淫せきがん 梵

一 あかさたなはまやらわより移るハわの字あよ紛る也

○ひつれ　かいち　さうり　さゝひ　なハ 縄 名ハ

えゝき木　たまりる　やハら　あつまる

但いろは後のかくわと名ないをんとすれば口内強まて

字ふゝ又和うるゑまハあよ紛るとうくあとゆうえ

ぬやうとゑたへし

一 うくすつぬふむゆるうより移るハわの字あとゆ紛る也

ゑハ性よわとゆうやうよつへし

○ゆくハ　すハ　三河編む　くふハ　給ふ者

作ハ　くむハ　ゆるハ　あるハ

一 うくすつぬふむゆるうより移るあの字ハあト のろよ

喝ふへし

草庵 サウアン　釈阿 シヤクア　素足 スアシ　初鮎 ハツアユ　皮膚合 ヒフアヒ

草鞋 サウアイ　曳網 ヒクアミ　酢敢 スアヘ　三足 ミツアシ　不合口 フアヒクチ

無安（ムアン）　湯浴（ユアミ）　春秋（ハルアキ）

南無阿弥（ナムアミ）　湯揚（ユアカリ）　古網（フルアミ）

意変あとゝえんとすれば口内強まるて字ふくゝ　但あ

の抑音ウウ引ゑよ長ふこうくすつぬふむゆるこウの

ひくきと依て也

一いきしちにひみいりゐ より移るあの字　やあ　のあよ

学へゝ　あノ上の仮名よ変を入てうつくゝ

帷幄（イアク）　氣相（キアヒ）　思案（シアン）　待合（マチアヒ）　谷間（タニアヒ）

最愛（サイアイ）　氣扱（キアツカヒ）　仕合（シアハセ）　立合（タチアカリ）　假合敷（カニアハシキ）

日足（ヒアシ）　見合（ミアハセ）　入相（イリアヒ）

日當（ヒアタリ）　見顕（ミアラハス）　有明（アリアケ）

意変あといえんとすれば口内強まるて字悪ゝ　但あ

の抑音イや引ゑよ長ふ也いきしちにひみいりゐこイ

乃ひくき有依て也　是ハたるくト唱

但塩飽（シアホ）所ノ名ゝ

○綾人（タトヒ）　綾人（タトヒ）霊　たゝへト字ゑぬやうよつゝへゝ

一 [ゑ]けせてねへめえれゑ[ゑ]より移る[い]の仮名[ゑ]を給ふ

ぬをうを帰ゆへ

青山（セエ セイ）　冷人（レエ）

○えを来[い]より出る[ゑ]也ゑけせてねへめえれゑ[ゑ]の

引きを依えゑに給ふ也年竟[い]の仮名ゐゑき故

なり爰を入ていゆへ

一 [ゐ]うのかお（ウウウトウやうを帰ゆへ）

育王山（イウウサン）　祇王（キウ）　四王天（シウテン）　鬼王（シニウウ）　横道（ワウダウ）

有王（アリウウ）　王伯王母（ウウハクウウホ）　青黄（シウワウ）　横障（ワウシヤウ）

あを 扇　おう 笠　ゐう（ウウウ 如此三字尾合ル）

[わ]ハ[う]より生する音まて[わ]と[えん]とすれ[う]の

ひきをあづと口内より生する也然ハ[う]の字を然と

加ゆるはあ〜祢と[わ]をふ用より唱へんとをまは自然と

[う]の引きゆゑ也[わ]ゆ公ゆ〜て為へを育王（アウ）祇王（アウ）

よ如なりされも先と開合ゑ〜く分明ゆ名まは

口内ふ自中にゆえて来〜か換の不ハ口傳を受ゑ〜

一 軟濁（ナンダク）の事

ハ ひ ふ へ ほ　三重濁（チウニウ）ともゑ

ハ ヒ フ ヘ ホ　不　唇内也

[フ]ハ能登の仮名也然ル[ふ]を毋字ヨリ重テ一音ヨリ呼ブ
変なり但字毎ヨリ呼ブベキ不ル事

一ゴ濁新濁清濁の変

濁ハ生ヲテヲ

五行（ギヤウ）　同道（ダウ）　一木（ボク）　元来ノ濁音也ケ濁ト云

禁制（キンセイ）　心中（シンヂウ）　王子（ワウジ）　元ハ元来ノ活字ヲ上ヨリノ
連続ヨ依テ濁ル　新濁ト云

是ハ用合ヨ変さのこりぬすゆ濁ケ濁の名ヲニ依記ス

一ヨ[ー]てゆ[ル]ヨ所ヨ[ホ]の仮名ヲ分実ヲ入テルベシ

日夜（ヒル）　怠ヨ怠ル

今氏（ウヂ）安安ヨ金沢

池水（ヒヤウ）ヨウル

そハ濁世（ヒル）のゆ[ル]

六塵（ヒル）のけうよまるひ

[たちつてと]の仮名ヘ移ル前の[ホ]乃字ヲ上ニ生ヲ

生ヲ（ヒル）ニ中ヲ[ヒ]ぬやうる呼ヲ

名（ヒル）ヨたちヲ私（ヒル）の

それヨつけても

なるよりて

かれくい茶私（ヒル）の

一（ヒル）ち絶ルて

汗出ヨく

一[て]の仮名ヘ移ル前の[ちつ]舌ヨ付テツムルやうニ中ヲ[ヒ]ぬ

やうよりヘ

○ありひたちて（ヒル）

こうて中

一訓の内 なにぬねの へうゆる前代 つ 乃仮名呑やうよ

やゝぬやうにいふ也

○姑 いたゞ あれ

○梅 乃まつ

一 さ の仮名 は と紛ぎぬやうにいふべきす

○さて

一 候 さふらふ

所〻に多き字故学べやう要れば是耳を立也

頭を そ と突ゆゝまうらふ又初の部にさふらふ

と下代長音ゝと云宜

一 ふ の仮名ゆうとやのやるす 勿論ふをいうと呼ぶ者

○形 いやさうよいよ〻しに

一初の不まて ー の仮名古は多て清ぬやうにいふ

○進 村取乃ー て

一 し の仮名 ひ とやゝぬやうにいふべきす

○涼 也 智恵明

一 ひ の仮名 し とやゝぬやうにいふべき変

○人 ひとち

七 秋の

むとち

ス　ひちりき

かやうの所ハ大くさ軟濁る習へて吉

一る のかな ろ とやうのえぬやうるよふへきす

○かるる。　本所。多き　やかるるもなし

ろ。ひハ　ろ。ようけ

一ぬ の仮名を字よやうのえぬやうるよふへきす

○知るぬ　おもりぬ　来ぬ夜

一ぬ のかな ろ の字よやうのえぬやうにいふへきす

○えぬいろは　笠をぬき　細ぬ人

一む の仮名 も とやうのえぬやうるよふへきす

○たむる　ふるひ　ふり

一わ の字 か と分をぬやうるよふへきす

○くるう　くるん　くるく　くるい　くるん　くるん　同等

くるハ わ のよる く を付三つを合せて一音ら刈先

きて物言の所よあり くわ ト く ノ音仮を考へし

一ゐ の字 し と分をぬやうるよふへきす

○ちゐん　ちゐく　ちゐん　同等

先もちゐと い の音仮を考へ

一ゑ の字ハ ゑ の字

一流よ短くツムルもあり又短くさ部ハ必延るゝ能程
ひ有へ〜但毋字をぬくく呼へてハのひすゝ部なり
延るやうなれ共まつあります〜筆ニハ記るゝ

三ケウ　月光地ゝいて　けェくうう
江　寒客もちのく　さァて
卒　月日ハ百代の過　もゥて
仏エツ　速閣成佛フツと　ちイ　ふゥと
アリサツ　雑祢ひとよ　ざァてい
日エツ　越てう南校　ゑェてう
好ケウ　月下入門　げェろ　如此なて
ゆふゝ

一右き書ニ　たり　の三字きめてゆへ〜と有
是ハあらちきめるはあ　たり　の字あらさたを
の訓よ記す如し　と　の仮名和らに呼へてハ浮上を
て必し唐ものゝ実を入ていゆへ〜
芭　○綿帳のもゝは　いと字浮尤章下ゝ
日　花ハくれかゝると知りと
日　そよかゝ亦婦とちゝ也　ゝと字氣ゆれを
日　秋とてもかとゝ　トスフ
地　おとのそハそひ行すも
日　たゝ〜かきねを祝ところ

楊柳観音ゑんどうれ
世ゝの木伝
すがハら善吳かゝ。ゝ。弥生
住生とうへ。と。ゝ。ゝり
人やゝゝゝん。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
一きの仮名も浦かなり古円まて実を入てゝ
王城のきゝゝを
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
天王祀別をかゝゝり

此花のようきてハ春ゝ
いゝ

あきの花みか
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一古書よ[びめぶ]の三字[べら]ハ二字ハうはくしく浴く
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
但花ハ長ゝゝぬやうにゝゝゝゝ
○びぶべゝ三字ハはひふへかゝ湯ゝの不ゝ花ス
○らゝゝ字ハはまやらわの内なれど長かゝぬやうよゝあて
唱ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きハ却てはやうよゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○めの字ハ点けせてはへめえれ点のにあれて前よ近如く点打へし

一たちつてとらりるれろ　舌音也故ニ通ズル点

○安伽陀龍王　「ちゃかつら　ちゃりつた」に帰ス

○雲林院　うりんゐん　又雲林院村ハうぢゐむらト云

○善塗　安宅　「せんど　せんろ」に

一三川ちゐのす

○雲林院　うりんゐん　寺泉殿　かせんてん　分延山

○栴檀　せんだん　千　人間　三ケ　人倫　みんりん

一二川ちる者字のす

○生者必滅　しやうしやめつ　日月　にちげつ

一引字ちるす

蛙　蕉　蕉泡沫　ばうまつ

士農工商　しのうこうしやう

上ノ短ク下ノ延ル也ノ文字送ニ点ス

右同

下一川ノ延ル

耶　郎　の

一三川ちゐのす

○栴檀　せんだん　千　人間　三ケ　人倫　みんりん

一二川ちる者字のす

○生者必滅　しやうしやめつ　日月　にちげつ

一引字ちるす

蛙　蕉　蕉泡沫　ばうまつ

士農工商　しのうこうしやう

上ノ短ク下ノ延ル也ノ文字送ニ点ス

右同

下一川ノ延ル

ゆ 孝行もたつれ　　ト ヲ延ル心

ゆ 花ぶさよてふまゝ　　ト ヲ延ル

を 翠帳紅閨　　上ヲ延テトヲ短ク

こ 高楼よりあがりて　　右同

行 極楽上人　　上ヲ延ル心

と 東光坊の阿闍梨　　中ヲ延ル

此引音の文字ハ大槩スボム字ヲツメテ用ク字ヲ伸ル
但柏子なる所のみ不ハ拗音
の味ひを少用ゐれ短文字送りまかくなるべし

一字隔ての同仮名甚耳よくあるもの

夏 ゆふはたいまい

ね かくやく

タ うゝだ

源 むらさきのまきの

一同仮名重るもの

ラ 実ハ何もさくらの花

ワ 草刈おのこまて行

虫 秋の野乃

田 ちゝたのも

芭 ちゝくまぐ

江 大ハよ麻ろくよく

ゆ うすゝむ

井 月もやすゝもゝ

芭 何ハ縁よりかゝ郎

杉 南ふとありけくつゝさるハ

仏 仏はおとやしゝて拗ハ

竹 ふく年久しゝてつゝ王

拾 ちんこのうの

去 まーてハあーあーてハ

後 名伝抄をそのうへて

一同仮名ゆゑ事

夕 みーもやーもぎう。んの

秋 むものまへとやーしへんそうそんへいーと

井 たのむ仏のうちへいと

芭 云の葉くさのうちへのうち

蛙 森へ本のうへ花くさのうなかけうなる原本へ下の

くうまのうへ多原へ二枚に

アリ 三けう本へ花のうちのうへ雷又秋へせみの吟の声

日 弟の男子のうへみーへへ袖

鶏 ちひとりいふこと・・・とうみとりふこ・・・もあれちーひ形

通 食者の能登のうる

らは

卒 ものおもーしきや

たのゆく日ーゆゆゆゆゆたけうぐよゆゆぬやうよ公路

一地ーて てふをは の仮名をいひすてゝ字の字頭へ

ゆく文字故文字双ひ強ふてゝく成或は てふをは の

仮名の下の章も必さぐ〳〵百中よいひたぐく

てにをは の仮名を兼ねたる字の字
字ハものづく相うかゝへし字ハ外 てゝをは ハ用ゐ
てゝをは ハ助語(チヨゴ)なれども字をたすけなれを勿論音曲
まと共ゝを以て字ハ陽てゝをは ハ陰也陰陽和合
なるゆへハ用ゐまし

一或説の書ニ曰 を 式りかのうつりハ悪く
に 式りかうつりハ善しとも

是大成解なるべしなるべし 歌書ハ悪きを
書きに と書るゝ所のたとへおけ(桶)こゝ(小)掬ひ事
かゆゝ事ゝ唱へよりて仮名を書かゝる事を

あまたも仮名を依て唱へかゝる事 いを ゑ の仮名
まはなる事なり且亦風ハ行の上ケトケを依て
式を もかゝく唱へ式 れ をかゝく唱ふ勿論拍
まよ云れ上下ゝうりまひられて也依上字依下
字ゝうゝを初ゝ事ハ乃にまゝ也

右用合音便を訓(ヨミコエ)音ともに五十字門出
仮名とくのうつり行新味を好ゝ
熟得ゝて又入聲(イリホカ)に為事を避(サリ)へし

吉野

奥山よりあくる秋は
ふる紅葉ちれる色を見まゝや
中くよりちかくあるよりあり
何まり深山乃おくを尋ゝく